



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	趣味縁の研究 : 札幌の0Y0Y0ゼミと前橋〇〇部の事例から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	加藤, 康子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第13704号
Issue Date	2019-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74990
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yasuko_Katou_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：加 藤 康 子

学位論文題名

趣味縁の研究

～札幌の OYoyo ゼミと前橋〇〇部の事例から～

本論文は、趣味を契機としたつながりである「趣味縁」についての実証研究である。伝統的な「縁」の分類は、選べない縁としての地縁・血縁と「選べる縁」である社縁を対置させるものであったが、社縁でさえ拘束性が高い現代日本では、その外側に第4の縁として（現実には）「選択できる縁」を想定するモデルが必要になった。その一つが趣味縁である。

研究対象となる趣味縁拠点の事例として、札幌の都心部で2008年から2017年まで活動していたOYoyo まち×アートセンターと、群馬県の市民活動「前橋〇〇部」の二つを取り上げる。

第2章では先行研究をまとめて、「趣味縁」という言葉が生まれた経緯と、その背景について述べている。伝統的な地縁・血縁といった繋がりとは、閉鎖的で固定的な関係の絆を強化することで「安心」を得るような、日本社会において特に重視される関係である。特に戦後、日本においても西洋的な、社会一般の良識に対する信頼をもとに構築される、拘束性のより低い関係が少しずつ広がっていった。1980年代までは、この加入・脱退が自由な関係を「社縁」と名付け、血縁・地縁と対置させるのが日本における「縁」研究の基本であった。一方、上野千鶴子は1985年に、代表的な社縁である会社縁でさえ、日本では拘束となり得ることを看破し、新たに「選択縁」というカテゴリを設けることを提案した。趣味縁は代表的な「選択縁」と言える。選択縁というつながりのあり方は、濃密な人間関係を嫌い、また「趣味に合ったらし」を志向する現代日本人の気質にマッチしており、趣味縁の研究は近年ますます注目されているが、趣味縁そのものを対象とした研究はまだまだ少ない。本論文はその学術的空隙を埋めようとするものである。

第3章では、札幌のOYoyoという趣味縁拠点をとり上げ、都市型の新たなつながりとしての趣味縁の学術的な位置づけを確かめている。2000年ごろから本格化した札幌駅周辺の再開発に伴い、大通が担っていた繁華な都心としての役割は、札幌駅前地区に比重を移していった。結果、オフィスビル等に長期の空室が多く見られるようになり、ビルの大家や、地域活性を目指す組織等にとって「街全体の衰退」が懸念材料となった。不動産業者や大家は、新たなコンテンツを求めたが、市民有志による非営利な文化活動は、契約者として不適格であるという理由で「想定外」であった。だが、ビル内の半分以上が空室という異常事態にあって、また大家とテナント双方の信頼が篤い仲介者の存在により、OYoyoの入居が進んだ。当初のOYoyoの基本コンセプトは、「部活」である。写真・美術・音楽といった各分野の活動に参加する「部員」が部費を納めた部費を中心に施設を運用し、「全員がスペースのオーナーであり運営者」という形をとった。その

後、部員数の減少などの理由で部活は統合・消滅などで数を減らし、最終的には「部活」という枠組み自体が廃止され、分野横断型の OYoyo ゼミに一本化された。このことは各自が「自分が得手とする分野」を閉鎖的に守ろうとするのではなく、全体の中で自分の興味のある分野を、新しいチャレンジの中で生かしていく、という意識改革が起こる契機となった。フロリダによる創造都市論が「人は誰しもクリエイティブである」と喝破しているにも関わらず、多くの創造都市の成功事例は「創造的（クリエイティブクラス）人材」の誘致または養成の形をとることが多い。OYoyo の事例は、地域住民がクリエイティブクラスに転換するでもなく、また、「本業」の隣接領域でクリエイティブな社会活動を行う「ハーフシフト」でもない、「本業以外」の趣味を通じて社会的文化的活動に貢献する「第2のハーフシフト」と言えるような状況が作られたことによって長続きし、成果を収めることができた。そのことは、労働商品としての自分と、全体としての自分との間で、個人が宿命的に引き裂かれ続ける、生きづらい現代にあって、OYoyo が「居場所」として機能し、個人の潜在資源の表出を促し、エンパワメントをもたらしている、とも言えるだろう。

第4章では、群馬県前橋市における「前橋〇〇部」の実践事例を、趣味縁の観点から検討している。このフィールドは、いわゆるシャッター街となった商店街である。OYoyo の事例と異なるのは、シャッターを閉めている店舗の大半は、事業所販売などで商売が成り立っており、地域を活性化し多くの顧客を呼び込む切実な理由がない。したがって、「地域活性化のためシャッター店舗を拠点として活用する」といったアプローチはもともととれない。OYoyo 同様、「部活」がコンセプトではあるが、よりゆるい、友だち同士で思い思いに過ごす放課後のイメージが強い。誰かが思いつきで「これやりたいんだけど」と声をかけると、賛同した人がてんでに集まって実施される。設立者の藤澤陽は、東京で多くのイベントを手がけていたクリエイターであるが、Facebook などネットを活用して、無料で簡単に好きなことで繋がるコミュニティを作る、場所に依存した繋がりに頼らない、というコンセプトは、「利己的な動機で動き、それが結果的に街のためにもなっている」という秋葉原の「リコリタ」活動から想を得ている。当初はネットベースの活動だけであったが、その後、シャッター街の一角にある空き店舗に拠点を設け、それにつられるかのように他の市民活動の拠点も見られるようになった。前橋の事例は商業地域の空きを、競合しない非商業用途で埋め戻すことで、エリアの変化を誘発した、成功例となった。趣味縁は(1)社会的「有用性」からの逸脱、(2)選択縁であること、(3)所属する社会集団内での既存の役割からの解放と変身の特徴とする。有用性から離れた「遊び」だからこそ、商店街のどの業種とも競合せず、参入が容易になったのである。中には趣味縁活動に参加する時間の蓄積の上で、本業自体を変えてしまった例さえ生じている。まさに「既存の役割から」解放され、「変身」を遂げたということであり、趣味縁の場が、市民の潜在能力の社会的発現をサポートするプラットフォームとして作用しうることの証左と言える。個人が「ノリ」でスタートした企画は、今や行政との連携や全国的に評価される経験を通して、前橋市を大きく変えようとしている。

第5章は、都市計画に言う「暫定利用」が、非商業活動の都心への参入を後押ししたことについて、札幌市内のアート系市民活動と、近年新たに作り壊し・建設されたビルのオープンスペースの利用のされ方などを通して論じた。現在では、趣味縁拠点の都心参入について、大家がそのビル全体へのブランディング効果に気づいて、積極的に誘致したり、暫定から本格利用へと移行する例さえ生じている。

以上の検討により、以下の結論を得た。

第1に、「一般的信頼」が低い日本人にとって、「閉鎖社会における安心」が失われつつある今、拡充が期待できるのが趣味縁である、ということである。

第2に、先行研究で扱っていた趣味縁は将棋、鉄道など1つの趣味の「同好の士」の関係であった。だが、実は複数の趣味を契機として起こる、緩やかな繋がりとしての趣味縁の方が、趣味縁本来の「遊び」「脱役割性」といった特徴を尖鋭化している。

第3に、趣味縁拠点は都心部の衰退やスポンジ化現象という経済・産業分野の問題をきっかけに始まるが、より積極的に動いて街を変えていく力ともなり得る。